

## ふじのくに地球環境史ミュージアムに望むこと

杉野孝雄

子供の頃の私は昆虫少年でした。80年ほど前のことです。当時住んでいたのは京都府舞鶴市で、毎日、捕虫網を持ち野山を駆け巡りチョウなどを採集、夏休みの作品展では、菓子の空き箱に採集した標本を並べて出品したりしていました。当時山で見掛けたキマワリの面白い習性やキベリタテハの姿が、今でも場所と共に脳裏に蘇ります。

植物に関心を持ち始めたのは静岡大学に入学してからです。大学生のときに静岡県内の植物を全部覚えたいと、暇があると胴乱を持って県内外を歩き回り、地域ごとに違う植物が分布していることに興味を持ち、調査を続けると共に、静岡県に保管されている植物標本の整理を始め現在に至っています。

ミュージアムに保管されている植物標本は、維管束植物、海藻類、地衣類、菌類、種子標本など20数万点あり現在整理中です。これをどのように保管し活用するかですが、保管は茶箱のような完全密閉容器に防虫剤を入れて保管するのが最適です。現在1/3ほどの標本はそうにして保管されていますが、その他はビニール袋で二重に包み保管しています。

活用では、一般公開用としての活用と研究資料としての活用があります。一般公開では、代表的な植物標本を台紙に貼り、分類して棚に順序よく並べ展示します。

研究資料としての植物標本は、すべての標本を台紙に貼る必要はありません。最重要なのはタイプ標本です。その他、現在は絶滅してしまった標本など重要な標本は、鍵のかかった場所に厳重に保管します。研究に使われた標本も大切に保管します。研究資料用の標本は、同定などの分類に使われるばかりでなく、分布、形態、生態、遺伝子研究など広く利用されるので、それに応じた同一種でも複数標本の保管が必要になります。

ミュージアムに保管されている植物標本は、各地に分散していた標本を集めたので、それを整理しデータベース化しなければ利用できません。現在その作業を進めていますが、必要なのは作業者と予算でどちらも不足してい



標本のデータ入力を行う杉野先生

ます。データベース化すると、標本に基づいた「植物誌」の作成ができます。「植物誌」は研究に使われると共に、教育資料、アセスメント資料、資源の開発など多くのことに利用される基本になる本です。最近各県で次々と作成されています。静岡県には1984年『静岡県植物誌』が作成されていますが、植物系統学の進歩、新分布の発見などで、時代に合わない内容になってきました。ミュージアムが中心になり『新静岡県植物誌』の作成が急務です。それには植物標本のデータベース化が先決です。

身の回りものはすべて基を辿れば、自然の素材やそれを工夫改良したものです。自然はすべての基です。昔の子供にはテレビやスマホはなく、自然に目を向け、自然に親しむ機会が常にあり、バーチャルではなく、自然を友とし自然から学んでいる子供が多数いました。現在は人為的に子供ばかりではなく、大人にも自然に目を向けさせる工夫が、昔以上に必要なのではないのでしょうか。その役割を荷っているのがミュージアムだと思います。他県の博物館にはない、専門家から直接教えが受けられるミドルヤード。大人の教育も視野に置いた、部屋9「ふじのくにと地球」。自然を活用した100年後の心豊かな暮らしを考えさせる、部屋10「ふじのくにと未来」は、充実して欲しい私のもっとも関心のある部屋です。また、多様化する需要に対応するイベント計画も着目したいと思います。